



上:メンターの矢野勝彦夫妻と 下:年50回以上、講演会を実施



都竹茂樹氏

熊本大学 政策創造研究教育センター 教授

(つづく・しげき) 1966年米国生まれ。91年高知医科大学医学部卒業後、社会福祉法人聖雲会聖雲病院で研修、95年名古屋大学大学院医学研究科健康増進科学満了後、国立長寿医療研究センター疫学研究部研究員、米国ハワイ骨粗鬆症財団研究員を経て、2001年に日本ボディデザイン医科学研究所を設立。02年米国Pacific Health Research Institute(ホノルルハートプログラム)研究員(〜03年)、06年ハーバード公衆衛生大学院Family and Community Health修了、07年高知大学医学部(公衆衛生学)准教授、11年から現職。

医局に所属せず、研究者を経て ヘルスプロモーションで起業 今は大学で、新モデルを模索中

父をはじめ親戚にも医師が多く、あまり深く考えることもなく医師になりました。父の留学時代の思い出を聞くにつけ「医者になって海外に行く」ことも魅力でした。

医学生時代は民間のジムでパワーリフティングという競技に打ち込みましたが、そこで「運動で体調がよくなる人」、「身体が変わると心も変わる」人を数多く見てきました。ところが大学で学ぶのは病気のことだけ。大学4年生のとき、骨粗鬆症だった祖母が転倒して大腿骨骨折、リハビリの末に亡くなったことも予防医学に関心を持つきっかけになりました。

ただ当時は予防医学に力を入れている医局はなかったので、トレーニング科学で有名な名城大学の教授へ手紙を書いて相談に行き、名古屋大学にちょうど健康増進関係の大学院が新設されると聞いて入学。名古屋市内の病院で研修しながら、骨密度と筋力トレーニングの関係を研究しました。博士号もこのテーマです。

卒業後は設立間もない国立長寿医療研究センターで、2300名を対象にした前向きコホート研究の立ち上げに関わりました。

1999年にはハワイ骨粗鬆症財団のリサー

チ・フェローとなりました。1年後に帰国、ヘルスプロモーション・プログラムを提供するビジネスを始め、健康保険組合や自治体などを営業して回りました。今でいう介護予防やメタボ対策です。大学や医局、病院にも所属していなかったため、最初はなかなか仕事をいただけず大変苦労しました。ただこの分野は将来絶対必要になると信じていたので、軌道に乗るまでは健診の事後説明のアルバイトで食いつなぎました。振り返ってみると、「健康のために何かをしよう」という気持ちの薄い人たちと向き合った当時の経験は、今の仕事に非常に役立っています。

人生観を変えた ハーバード公衆衛生大学院

2002年、ハワイのホノルルハートプログラム(日系人8,004名の大規模疫学研究)の矢野勝彦先生の研究所でお世話になりました。ここでも手紙を書いてお願いし、いわば押しかけです(笑)。矢野先生は仕事でも人生でもメンターになりました。日本でビジネス、ハワイで研究と毎月往復しながら、やはり医療統計や疫学をき

ちんと勉強すべきだと考え、矢野先生に相談して40歳のときハーバード公衆衛生大学院(HSPH)に入学しました。

HSPHには発展途上国から「国を背負って」来ている人たちも多く、自分は社会のために何ができるのかと考えるようになりました。人生観が変わりましたね。

日本に予防医学を根付かせるためにはパブリックヘルスマインドを持った臨床医が不可欠だと思い、修了後は母校の教壇に立ちました。予防医学に「も」興味を持つ学生は多く、勇気づけられました。

昨年、ヘルスプロモーションに本腰を入れるため、自治体との連携、地域貢献を重視している熊本大学に移りました。この新天地でもう一度ゼロから介護予防やメタボ対策を中心としたヘルスプロモーションに取り組みます。今後は病院との連携にも力を入れ、成果を全国や世界に広めていくことが目標です。

こうして振り返ってみると、あちこち寄り道をしてきたようにも見えますが、すべては「予防」というキーワードで繋がっていると改めて感じます。私の夢は、診断と治療だけの医療ではなく、「まずは予防、それでも予防できなかったときに初めて治療」という意識が国民、医療従事者の間に根付くことです。そして、防げる病気は予防して、皆がハッピーに生きていくお手伝いができれば最高だなあと思っています。

生まれ変わっても、やっぱりドクター?

何になるかなあ。何の仕事をしていても、ワクワクする人生を送りたいですね。

文/小島あゆみ



上:メンターの矢野勝彦夫妻と 下:年50回以上、講演会を実施



都竹茂樹氏

熊本大学 政策創造研究教育センター 教授

(つづくしげき) 1966年米国生まれ。91年高知医科大学医学部卒業後、社会福祉法人聖霊会聖霊病院で研修。95年名古屋大学大学院医学研究科健康増進科学満了後、国立長寿医療研究センター疫学研究部研究員、米国ハワイ骨粗鬆症財団研究員を経て、2001年に日本ボディデザイン医学研究所を設立。02年米国Pacific Health Research Institute(ホノルルハートプログラム)研究員(〜03年)、06年ハーバード公衆衛生大学院Family and Community Health修了、07年高知大学医学部(公衆衛生学)准教授、11年から現職。

医局に所属せず、研究者を経て ヘルスプロモーションで起業 今は大学で、新モデルを模索中

父をはじめ親戚にも医師が多く、あまり深く考えることもなく医師になりました。父の留学時代の思い出を聞くにつけ「医者になって海外に行く」ことも魅力でした。

医学生時代は民間のジムでパワーリフティングという競技に打ち込みましたが、そこで「運動で体調がよくなる人」、「身体が変わると心も変わる」人を数多く見てきました。ところが大学で学ぶのは病気のことだけ。大学4年生のとき、骨粗鬆症だった祖母が転倒して大腿骨骨折、リハビリの末に亡くなったことも予防医学に関心を持つきっかけになりました。

ただ当時は予防医学に力を入れている医局はなかったので、トレーニング科学で有名な名城大学の教授へ手紙を書いて相談に行き、名古屋大学にちょうど健康増進関係の大学院が新設されると聞いて入学。名古屋市内の病院で研修しながら、骨密度と筋力トレーニングの関係を研究しました。博士号もこのテーマです。

卒業後は設立間もない国立長寿医療研究センターで、2300名を対象にした前向きコホート研究の立ち上げに関わりました。

1999年にはハワイ骨粗鬆症財団のリサー

チ・フェローとなりました。1年後に帰国、ヘルスプロモーション・プログラムを提供するビジネスを始め、健康保険組合や自治体などを営業して回りました。今という介護予防やメタボ対策です。大学や医局、病院にも所属していなかったため、最初はなかなか仕事をいただけず大変苦労しました。ただこの分野は将来絶対必要になると信じていたので、軌道に乗るまでは健診の事後説明のアルバイトで食いつなぎました。振り返ってみると、「健康のために何かをしよう」という気持ちの薄い人たちと向き合った当時の経験は、今の仕事に非常に役立っています。

人生観を変えた ハーバード公衆衛生大学院

2002年、ハワイのホノルルハートプログラム(日系人8,004名の大規模疫学研究)の矢野勝彦先生の研究所でお世話になりました。ここでも手紙を書いてお願いし、いわば押しかけです(笑)。矢野先生は仕事でも人生でもメンターになりました。日本でビジネス、ハワイで研究と毎月往復しながら、やはり医療統計や疫学をき

ちんと勉強すべきだと考え、矢野先生に相談して40歳のときハーバード公衆衛生大学院(HSPH)に入学しました。

HSPHには発展途上国から「国を背負って」来ている人たちも多く、自分は社会のために何ができるのかと考えるようになりました。人生観が変わりましたね。

日本に予防医学を根付かせるためにはパブリックヘルスマインドを持った臨床医が不可欠だと思い、修了後は母校の教壇に立ちました。予防医学に「も」興味を持つ学生は多く、勇気づけられました。

昨年、ヘルスプロモーションに本腰を入れるため、自治体との連携、地域貢献を重視している熊本大学に移りました。この新天地でもう一度ゼロから介護予防やメタボ対策を中心としたヘルスプロモーションに取り組みます。今後は病院との連携にも力を入れ、成果を全国や世界に広めていくことが目標です。

こうして振り返ってみると、あちこち寄り道をしてきたようにも見えますが、すべては「予防」というキーワードで繋がっていると改めて感じます。私の夢は、診断と治療だけの医療ではなく、「まずは予防、それでも予防できなかったときに初めて治療」という意識が国民、医療従事者の間に根付くことです。そして、防げる病気は予防して、皆がハッピーに生きていくお手伝いができれば最高だなと思っています。

生まれ変わっても、やっぱりドクター?

何になるかな。何の仕事をしていても、ワクワクする人生を送りたいですね。

文/小島あゆみ